



「寄り添う」というお仕事

「寄り添う」というお仕事は、
いいこと・悪いことの基準をもとに、行うべきものです。
どういいのか・どう悪いのかを明確にして、行うべきものです。
「寄り添う」というお仕事は、
「寄り添う」相手の自己責任ということを大切にして、行うべきものです。
寄り添う相手の行為の結果は、その相手に帰するということを、
明確にして、行うべきものです。
相手の＜自己性＞を前提にして、はじめて自分の＜他者性＞が生まれ、
そこに「寄り添う」という関係が生まれるのです。

いいことも悪いことも、その行為の結果は
その行為主体が引き受けていくもの。
それがあってはじめて傍らに立ち、寄り添うことの意味が生まれてくるのです。

その人が起こそうとしている行為を前にして、
あるいは起こしそうな行為を前にして、
それが悪い結果をもたらすことが予想できた場合、
私たちは、ときに前に立ちはばかり、
ときに隣りで手を取り、
ときに後ろから見守り、
その行為の抑止に努めます。
それが「寄り添う」ということです。

しかし、そこには「他者性」の限界もあり、
どれだけ相手の心に働きかけても、
相手の心そのものにはなれないのです。

相手の起こした行為が、
予想通りに、あるいは予想を超えて、
悪い結果を引き起こしてしまうことは多々あります。
思えばこの仕事は、落胆の底に沈んだりまた浮揚したりの
繰り返しでしかないのかも知れません。

引き起こされた悪い結果に対して、
それをただ責め立てるだけの関係は、
「寄り添う」ことから逃げるための口実でしかなく、

＜相手の自己責任・自分の他者性＞という前提を忘れた、
自分自身の動揺の吐露でしかありません。

「寄り添う」というお仕事は、
引き起こされた結果に対しての相手の自己責任を前提として、
その悪い結果の軽減のために、
ときに前に立ち、ときに隣りで手を取り、
ときに後ろで見守り、
そしてときに周辺を回ることです。

「寄り添う」というお仕事は、
いいこと・悪いことの基準をもとに、行うべきものです。
どういいのか・どう悪いのかを明確にして、行うべきものです。
そこが明確でないと、いい寄り添い方を見つけ出すことはできないのです。

ここにはたくさんの仲間たちがいます。
自虐行為によって、生命の危機に陥ってしまった仲間たち。
それによって失明してしまった仲間もいれば、
まさに今病室で闘っている仲間もいます。
それがどんなに衝動性の結果でしかなく、
その衝動性が障害ゆえなのだとしても、
誰も痛みを代わってあげることもできず、
誰も失われた機能を代わってあげることもできないのです。
行為主体が自分で引き受けていくしかないのです。

「寄り添う」ということは、何がどう悪いのかを明確にして、
その軽減のために微力を尽くすことです。
家族や仲間たちの心配や負担をかけたことは悪いこと。
ならばその負担の軽減のために微力を尽くすことが、
その行為主体＝責任主体に「寄り添う」ことになります。

結果的に人の命を奪ってしまった、まだ姿を見せぬ仲間もいれば、
自分に刃を向いてしまった仲間もいます。

「寄り添う」ことの無力さに、絶望的な気持ちになりながらも、
なお「寄り添う」以上のことはできない＜他者＞としての私たち。
引き起こされた結果の何が悪いことであり、そこにどう「寄り添う」のか。
残された家族や、残された仲間たち。
自分を責めてしまったり、

ときに自分以外を責めてしまったりという苦しみの只中にいる人たちに、
自分がしてあげられることは何なのか。
自分自身が絶望の底にありながらも、
いや絶望の底にあるがゆえにこそ、
「寄り添う」道を探し求めなければならない。
それが「寄り添う」というお仕事なのです。

何度反省しても窃盗癖や放浪癖が治らない仲間たち。
暴力行為を繰り返してしまう仲間たち。
「寄り添う」ことの無力さに、
絶望の底とそこからの浮揚を繰り返している私たち。
それでも「寄り添う」ことしかできず、
無力さと誇りの調和の中でのみ、私たちは前を向くことができるのです。

「寄り添う」相手の命の有限性を深く自覚しつつ、
同時に「寄り添う」自分自身の命の有限性も自覚する。
そうすれば、＜自分＞を越えた＜自分＞の必要性の自覚につながります。
つまり、「寄り添う」ためには、
＜他者へのバトンタッチ＞もいずれは考えなくてはなりません。
そのバトンを落とさず渡すこと。それが「寄り添う」ということなのです。

大切な仲間の＜死＞を受けて、
等しく有限性から逃れられない自己を前提に、
書き残しておくべきことと、
自分に言い聞かせておきたいことを、

本稿にまとめました。

平成23年9月3日 執筆